

本時の目標

◎ヨーロッパの農業大国はどこか理解し、それぞれの地域で、気候に合わせた農業が行われていることを理解する。

資料集の提示資料	発問例と予想される反応例(▶は教師の説明)	留意点など
A 混合農業 A1 主な国の農産物自給率 A2 小麦の輸出国 よみとき②	T ヨーロッパの農業国は、どこだと思いますか？ S 農業国？ヨーロッパって、どちらかという工業国のイメージがある。 T ずばりフランスです。フランスといえば、思い出すのは？ S 凱旋門、エッフェル塔、シャンゼリゼ、ナポレオン、フランスパン、ワイン…。 T 最後の方に出てきたフランスパンの原料は？ワインは？ S 小麦。ぶどう。 T フランスの農業について説明する。 T ヨーロッパ大陸の大部分で見られるのが、混合農業という形態です。畑作と家畜の飼育を合わせて行う農業ですね。ヨーロッパの降水量も少ないやせた土地で生活していた人々は、昔からその土地にあった農業を生み出していきました。やせた涼しい土地でも育つジャガイモは大変重宝がられました。自分で育てて自分で食べることを何といいますか？ 自給自足。 ▶混合農業(土地をまわしての活用)について説明する。	◆自由に発言できる雰囲気をつくる。 ★話し合い活動 フランスで思い出すことを話し合う。 ◆ぶどうが日本と違って棚でなく「垣根」になっている。p.28「温帯の気候の違い」を参照する。 話し合い活動や、作業の例示。 ◆昔ま土ていくことを着目させる。 ◆16世紀に南アメリカから伝来したジャガイモは、中世ヨーロッパでは、「聖書に書かれていない」「勝手に土中で増える」から「悪魔の食べ物」と考えられていた。
B 地中海式農業 B1 B2 B3	T 地中海性気候の特徴は？ S 夏に雨が少なく。冬に雨が多い。 T その気候に適した農産物に何がありますか？ S オレンジ。 T そうですね。柑橘系の農産物のほかに、オリーブ、コルクがしなどもあります。 ▶スペインを中心にして、オレンジ、ぶどう、オリーブの生産と輸出について説明する。	◆「混合農業」「地中海式農業」などの用語について、記載のない教科書もある。語句の解説ではなく、気候に合った農業が行われているということを説明する。 ◆アメリカのカリフォルニアや瀬戸内海の小豆島の話の方が、生徒には理解しやすい場合もある。
C 園芸農業 C1 生花の輸出国	T ⑨の写真では、チューリップの花を刈り取っています。 S 取っちゃうのですか！？もったいない。 T そうです。花を刈って国で、その花を売ります。 S コンピューターと大スクリーンでの取り引きが写っている。花が見えないよ。 T 世界中の花の取り引きが行われている現場ですよ。 S ヨーロッパだけじゃないんですか。 T そうです。ケニアのバラがフランスの食卓に並ぶのです。 ▶生花の輸出国について説明する。 T オランダでチューリップの栽培が盛んになった理由は、国土の多くが低地の砂地で、小麦の栽培に適していなかったことによります。	★作業 D2 「ヨーロッパの農業」について地図の色ぬりをする。 D 解答表示 ヨーロッパの農業 ◆歴史的にチューリップの球根が高値で取り引きされていた話を交える。 ◆球根栽培は、日本でも富山県などで行われている。 関連するデジタルコンテンツの紹介。 ◆p.6「オランダの干拓地」を参照し、排水のための風車や運河について触れる。
D 酪農	T オランダはチーズでも有名ですよ。 S 牛がたくさん飼育されているということですか。やわらかく水っぽい土地でも牛には関係ないのか。 T 小麦には適していない土地でも、牧草地や牛の飼育には支障ありません。 S 水平に移動して草を食べさせるのではなく、移動して、夏は高原の牧草地、冬は平地で放牧するのです。 S やはり、気候や自然や地形にあった農業ですね。	◆昔は木ぐつ(←p.6)が使用されていたことなどにも触れる。 ◆スイスの風景から、牛の放し飼いを連想させる。 ◆気候を生かした農業を強調する。

資料集に掲載の資料名。

Tは教師の発問例、Sは生徒の反応例を表します。

授業をふり返る際の視点と、次の授業へつなげる視点。

おわりに

ふり返る／連作障害を防ぐ農業、地中海で行われている農業など、気候と農業のつながりが理解できたか。
 次へつなげる／日本で行われている農業と共通するものを予想する。

本時の目標

●日本の各工業地帯・地域の特色を理解する。また、日本の工業の変化や、工業が国際化していることを理解する。

資料集の提示資料	発問例と予想される反応例(▶は教師の説明)	留意点など
A 工業がさかんな地域 写真 水島臨海工業地域 写真 鹿沼工業団地	T 煙突が赤と白に塗られているね。どうしてかな？ T 飛行機の飛ぶ現代では、60m以上の高い塔は赤白に塗るなど目立たせることが義務づけられています。この工場が密集している地域では何を生産しているのでしょうか？ S 石油の精製。 T このような場所に、石油精製の工場が多い理由は？ S 海に近いから。石油のほとんどを輸入しているから。 T 一方の東芝と住友電工の工場は海岸沿いでなく内陸です。どうしてでしょうか？ S 製品の組み立てや、食品工場は、原材料を輸入に頼らないから、港の近くでなくてもよい。 T 製鉄や石油関連企業は、港が重要で、自社で港を建設するくらいですが、そこにもものすごく資金がかかります。それでは、ICなどの半導体関連工場は？ S 内陸。 T 製品が小さくて軽いから、トラックで運べる。大切なインフラ、社会資本は何でしょうか？ S 広い道路、高速道路がそばにあると便利。 ▶ICなどの半導体関連工場、石油コンビナートと製鉄所の分布を比較しながら説明する。	◆生徒の素朴な疑問を大切にしながら、授業の核心に進む。 ◆一般的に、煙突が高いと、排ガスの地上への影響は少なくなる。煙突を高くする理由を考えさせることも面白い。公害問題や企業の環境対策にも注目が集まる。 ◆地図で場所を確認しながら授業を進める。 ◆鉄道と高速道路を意識させる。 ◆石油に関連する事業は、開発や整備、備蓄などに、政府の方針などが関係していることも留意させる。 ◆鉄道での運搬も考えられるが、実際の機械工業の輸送の大部分は、トラック輸送が担っている。
A1 各工業地域の工業出荷額 A2 全国の工業出荷額	T 日本全国の工業出荷額グラフと比較して、各工業地帯・地域の特徴は何か？ S 各工業地帯・地域の中で、ダントツ1位は中京工業地帯。機械が多いのは、自動車産業が盛んだからですね。 S 2位は京浜工業地帯。首都東京の近くだから当然なのかな。特徴はわかりにくいな。その他が多いけど…。 T その他の中に「印刷・同関連」という項目があります。規模が小さいのでグラフには表れにくいけれど、東京が1位。印刷・同関連は三大都市圏が多くなっています。 S 3位から5位は、出荷額ではあまり差がない。 T そうですね、年によって順位に変動がありそうですね。でもあえて特徴を探すとしたら…？ S 瀬戸内と北関東を比べると、金属と化学は瀬戸内が多く北関東が少ない。逆に機械は瀬戸内が少なく北関東が多い。やはり海沿いか内陸かが見えますね。	◆主な工業分類を改めて解説することで、生徒の理解は深まり、発問にも反応ができるようになる。 D)解説アニメ 各工業地域の工業出荷額 ★話し合い活動 思いつく出版社をあげて、どこに立地しているか話し合う。 ◆細かい点を大切にみていく視点は重要であることを強調する。 ◆北関東では、おもちゃに関する工業団地があり、「おもちゃのまち」という駅名もある。町名にも「おもちゃのまち1丁目」から「5丁目」まで存在する。
コラム 貿易品目から分かる日本工業の変化とは…？ B1 海外進出している日本の製造業 B2 各国の賃金の比較 B3 自転車の国内生産台数の推移	T 戦前から戦後、近年までどんな変化がありましたか？ S 輸出は戦前から戦後で、繊維品から機械機器に変わった。輸入は繊維原料から原油に変わった。 S 原油は1975年から最新年では減っているよ。 S 1975年から最新年では、総額が大幅に増えているよ。だから割合は下がっても、額は増えている。 S 輸出はやはり自動車が増えた。 S でも貿易摩擦で、アメリカなどの現地生産も増えた。 T マレーシアの工場でも、日本製品を製造しています。なぜでしょう？貿易摩擦が理由ではないでしょう？ S 人件費が安く上がるから。 ▶各国の賃金の比較(月給)について説明する。 T しかし工場が出て行くと、日本の国内の工場はどうなるのかな？ ▶産業の空洞化について説明する。	★作業 貿易品目から分かる日本工業の変化を考える。 D)解答表示 貿易品目から分かる日本工業の変化とは…？ ◆実額と割合は混同しやすいので注意させる。総額×割合＝その工業の出荷額である。 ◆アメリカの学習や公的民的分野の学習と関連付ける。 ◆自転車の例を使って解説する。

おわりに

ふり返る 工業地域の分布の特徴にはどのようなものがあるか理解できたか。

次へつなげる 各地域を特色付ける製造品は何か、その地域にどのような影響を与えているかを考える。

著者からのメッセージ

私は、新卒で東京都の公立中学校に赴任しましたが、当時は校内暴力が盛んな時期で、とにかく授業を成立させるには、誰もが面白いと感じる授業を展開しなくてはなりませんでした。そこでは、問題を起こす生徒、よく学習についてきてくれる生徒は、いつも授業の主体となれましたが、大多数の「サイレント・マジョリティー」をどのように導くのが課題となり、一人も残さず全員が学びを実感できることを意識しました。次に、国立大学附属中学校では、より深い学び、将来につながる問いを考えるようになりました。

海外の日本人学校での経験は、様々な個性あふれる生徒たちをさらに輝かせていく取り組みを重視しました。また、校長という立場もあり、社会科だけでなく教育全体を考えることにも意識を広げることができました。帰国してからは帰国子女の相談窓口の勤務をして、日本語、日本の歴史、日本の地理、日本の政治・経済・社会・文化に対する知識不足・無関心な生徒に対し、いかにこの学習に意味があるのか、また、興味深いものであるのかを伝えることに全力を尽くしました。そして現在、これらの経験を生かして、大学で教職課程を担当しています。

授業で意識してきたことは、生徒自身が学び考えること、学び考えることが好きになることです。授業には目標があります。しかし、その目標は2つくらいに絞られ、重要ではありますが、とすると抽象的であり網羅的でもあります。もっと具体的で生徒の生活に密着したもの、生徒にムムツと言わせるもの、生徒が面白いと感じるものでなければならぬと考えます。「細部に神宿るらん」とは昔から言われてきたことではありますが、まさに小さな発問に全力で取り組むことにより、生徒の目は輝きを増します。問いに対し自ら考え、他の言葉に耳を傾け、自分の言葉で表す。それは、生徒の思考を広げ、判断を迫り、表現していくことにつながります。

生徒の返答・発言には、ハッとさせられることがしばしばあります。小さな細かい問いに対する答えが、とても大きな広がりのある考えに結び付いていることを意識させられるからです。そこで、こちらからの問いも、1時間の授業だけでなく、単元、分野、教科を越えたもの、将来に渡っていくものを意識することにより、学びに向かう力、人間性などにも結実するものになると思います。収斂と拡散の繰り返しが行われていくのでしょう。

この発問展開集は、発問例や対話の展開例をあげています。例ですからアレンジして、もっと良い発問を練る手がかりとなることを願っています。

清泉女子大学文学部 教職課程特任教授

平田 博嗣